

挿絵 金目鯛びんく  
竹内けん



試し読み版

第1巻  
戦国  
艶武伝  
〜 烈火の抄 〜



おだこしく  
織田五徳

信長の娘。訳あって婚家を追われてしまった美貌の未亡人。

# ◆◆◆ 目次 ◆◆◆

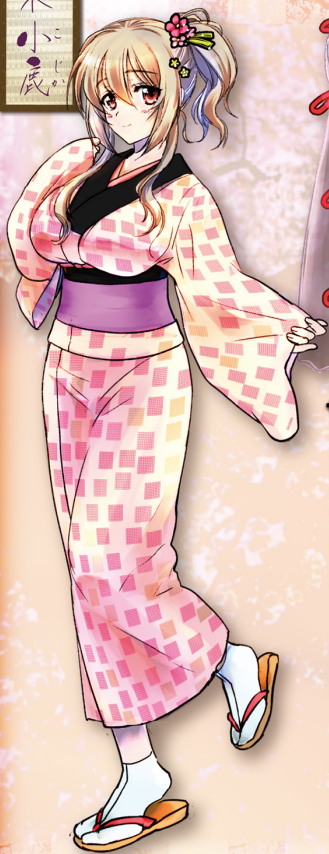
- 第一章 初陣
- 第二章 高天神城の戦い
- 第三章 甲州の女狩り
- 第四章 長久手の戦い
- 第五章 蟹江城の攻防戦
- 第六章 奉公構え

211 172 134 086 050 004

戦国  
武伝  
第1巻  
~ 烈 大 の 抄 ~

勝成に見初められた刈谷  
城下の町娘。男好きする  
身体の癒やし系。

あおき  
青木  
こころ  
小沢



まくらばいっ  
梅庭  
りつこ  
律子

武田家臣の娘。松姫の側近  
として、高い教養と誇りを  
もつ武家の女性。

みずのとうけい  
水野藤十郎勝成

鬼日向とも称された猛将か  
つ水野家の嫡男。奔放な  
性格で戦好きの女好き。

## 第一章 初陣

「ちきしよめ！」

真新しい鎧兜に身を包んだ少年は、大声で泣きわめいていた。

眼下では、武田菱たけだびしの描かれた赤い軍旗の群れが、大地を這はう血の大河のように肅々と撤退して行く。

悔し涙に濡れた眼に強い光を宿して、まっすぐに敵軍を睨みつけた彼は、真っ黒に日焼けした肌をし、彫りの深い目鼻立ち。すらりとした長身は鞭のようにしなやかで、極限にまで鍛えられている。いざとなれば爆発的な瞬発力を発揮するであろうその恵まれた体たく軀は、猛々しい性格とあいまって武士の子弟以外には考えられない雰囲気を出していた。「せっかく初陣の功名をあげようと思ったのに！ これじゃあげられねえじゃねえか！ 勇猛でならした武田家もこんなものか！」

これがのちに『鬼日向』『軍勝成』と異名をとり、猛将の名をほしいままにした水野みずの藤十郎勝成とうじゅうけい、十六歳、初陣の日の肖像である。この時代、生まれてすぐに一歳とする数え年なので、今風にいえば十五歳の少年であった。

——場所は遠州掛川。えんしゅうかけがわ ときに天正七年（1579）九月二十八日のことで、戦国時代の佳境として知られる『元龜天正の戦』げんきてんしやうの只中である。

中央に巨大な勢力を持った織田信長と、それに反発して名目的に室町十五代将軍足利義昭あしかがよしあきを奉じた連合軍との死闘が繰り返された時代だ。

足利陣営の雄のひとりにして、甲斐、信濃、上野、駿河、遠江とおとうみにまたがる領主であった戦国大名武田勝頼たけだかつよりは、勇猛という点では戦国屈指の武将だった。しかしながら、目前に敵がいれば戦うという近視眼的な猪武者ではない。戦局に利なしと見れば、戦略的撤退もする。

勝頼ほどの勇将をして戦わずに退かねばならぬほどに、勢力の均衡が大きく崩れたそもその原因は『御館の乱』おたてに起因した。

これは前年の天正六年（1578）三月十三日、足利連合軍で最大の軍事力を持ち、越後の軍神「毘沙門天の化身」びしゃもんてんとして名高い上杉謙信うえすぎけんしんが脳溢血で死去し、その後継者の座をめぐって、謙信の姉の息子・上杉景勝かげかつと、関東の雄・北条家から養子（景勝の妹婿）に入っていた上杉景虎かげとらが家督を争った事件である。

当然ながら北条家四代目当主・北条氏政うじまさは、一族の上杉景虎を支援した。

しかし、氏政の妹を妻にしていた勝頼は、敵方の上杉景勝に妹の菊姫きくひめを嫁がせて支援す

る。

一見、勝頼の不義にも見える行為だが、上杉と北条は関東の支配権をめぐつて長年抗争を続けてきた宿敵同士であった。上杉謙信が反信長陣営に身を投じた瞬間から、北条は信長陣営との接近を図っていた節が見られ、勝頼としては北条に信をおけなかつたのだ。しよせん、足利連合軍は野合集団にすぎなかつたという典型的な事例のひとつといえるだろう。

いずれにせよ勝頼の支援に勇を得た景勝は、一年を超える抗争の果てに今年の三月二十四日、ついに上杉景虎を討ち取つた。

これにて『御館の乱』は終了したのだが、北条氏政は激怒。それを名目に武田勝頼との同盟を破棄し、九月五日、武田氏の当面の敵、東海の雄・徳川家康とくがわいえやすと和議を締結。共通の敵として武田勝頼にあたることを約束した。

九月十五日、武田勝頼と北条氏政は、甲相国境こうそうの黄瀬川を挟んで対陣。遅れること二日。十七日には、徳川家康もまた遠州掛川に出陣した。

仮に掛川を押さえられると、武田の遠州における拠点高天神城たかてんじんが敵地で孤立することになる。それを恐れた勝頼は、北条には押さえの兵を残しただけで、主力を率いて掛川に向かつた。しかし、二正面作戦を強いられた勝頼は、交戦することなく掛川から甲府へと馬

を返すことになったのだ。

さすがにその退却は、追撃を許さない見事な指揮ぶりだったが、敗北は敗北である。

徳川軍は戦わずして勝利した。つまり、徳川・北条同盟という戦略の勝利である。いや、それだけにとどまらない。戦わずに撤退したということは、武田軍の軍事行動が遠州には及ばないということを証明したことにもなるのだ。

この瞬間こそ、徳川と武田の長くて苦しい戦いの一大転換点となる。

しかし、沸き立つ北条軍とは違って、徳川軍は少しも浮かれたところがなかった。

徳川軍の出陣が、北条との約定の日より二日遅れたのには理由がある。

十五日、徳川家康の嫡男信康のぶやすが自害していたのだ。勇猛果敢な若武者として将来の期待を一身に集めた御曹司が、二十一歳の若さにして自刃せねばならなかったという緊急事態のために、徳川軍の出陣は遅れていたのである。

無論、初陣の功名のみを考えていたこのときの勝成には、そんな雲の上の話はどうでもいい。情けなくも、一戦も交えずに逃げていく武田軍を涙ながらに罵倒し続けていた。彼にとって、戦場とは手柄を立てる場所にすぎなかったのだ。

「武田勝頼の臆病者め！ 引き返してきて俺と戦え！」

猛々しい叫び声が、山野に虚しく木霊していた。

「……こたびは誠にご愁傷にござりました。心からお悔やみを申し上げます」

失意のうちに帰陣した勝成を待つていたのは、さらに気が滅入るような仕事であった。

すなわち、徳川信康の未亡人を実家の織田家に送り届ける任務が水野家に下ったのだ。

「拙者、三河刈谷城までの護衛を仰せつかりました水野惣兵衛忠重にございます。倅の藤

十郎共々、以後、お見知りおきくだされ……これ藤十郎、姫さまにご挨拶を」

父親に従って進み出た勝成は、うら若き姫君の圧倒的な美しさの前に、つい先ほどまで

初陣の功名があげられずにごねていたのも忘れ、声もなく見惚れてしまった。

織田五徳。織田信長の長女にして、徳川家康の嫡男・信康の夫人であった女性だ。

女子を二児出産していたが、息子を失ったばかりの家康はふたりの孫娘までも手放すこ

とを潔しとしなかった。

そのため、五徳はたったひとりでの寂しい里帰りを余儀なくされる。子持ちの未亡人と

いつても、いまだ二十一歳の若さだ。

織田家は美人の家系といわれている。大名家などの特権階級に生まれる男は、正室こそ

政略結婚で迎えるが、側室として好きだけ美人を物色するのだから、必然的に美貌の男

女が増えるのだ。



五徳の母・吉乃きつ乃は、その美貌ゆえに若き日の信長に見初められた。信長は、美濃さいとうどうさん斎藤道三の娘・帰蝶きちよう（濃姫のうじめ）と政略結婚し、他にも数限りない女性に手を出したが、本当に愛していたのは吉乃といわれている。

吉乃に対する信長の寵愛は大変なもので、信長の後継者・信忠のぶただが吉乃の腹であるのはもちろん、次子の信雄のぶかつは別の側室の生んだ子・信孝のぶたかよりも二十日ばかり遅く生まれたにもかかわらず、次男としたほどであった。

しかし、信長の寵愛が激しかったばかりに、信忠、信雄、五徳という三人の子供を年子で産んだため、吉乃は体を壊して亡くなったという。

冷酷非情の代名詞として語られる信長をして、小牧山城こまきやまの櫓やぐらにのぼり、はるか西方の墓地を望んでひとり涙を流さしめたというから、吉乃の死がいかに悲しかったかが窺うかがえる。

五徳は、その娘だ。父母いずれに似ても、美人になる血筋にある。

「これ、藤十郎……！」

戦のことしか考えたことのない武辺一辺倒の少年が、思わず馬鹿のように口を開けて見惚れてしまったのも無理からぬことだろう。

「水野藤十郎勝成にございます……道中、命に懸けてお守り申し上げます！」

水野氏の通字は「忠」である。勝成にも「忠則ただのり」という名前があるのだが、本人的には

氣に入らなかつたようで、生涯に一度しか使った記録がない。

息子の名乗りに忠重はもの言いたげな顔をしたが、貴人のまえであるということで、自重したようだ。

儂げな美貌の未亡人は、一同に目礼してから華美な駕籠に乗り込む。

(いやー、綺麗な人だなあ、眼福眼福)

氣の重くなる主命に肅々と従う兵士たちの中にあつて、勝成はひとり上機嫌で張りきつていた。

この天正七年(1579)とは、終わりなく混沌を極めた戦国時代の行方に、ひとつの終着点が見えた年である。

すなわち、十一年間もの長きにわたり織田信長に執拗な抵抗をしていた宗教集団の長・本願寺ほんがんじ顕如けんじよが、まだ余力があるにもかかわらず十二月二十五日、その軍門に下つたのだ。天下人はいよいよ織田信長だ、とだれもが確信する。

無論、顕如が徹底抗戦を諦めた判断材料に、反織田信長の一大旗手であつた上杉王国の崩壊、北条の離反、そして武田軍の遠州掛川の撤退という一連の重大事件の影響が多分にあつただろう。

信長本人も、自分こそが天下人だという絶対の自負を抱いたらしく、これを機会に、家

中の大粛清を行なった。

それまで筆頭家老であった林秀貞を二十五年前に謀叛した罪で追放。織田家中で最大の兵力を与えられていた宿将・佐久間信盛も、石山本願寺城攻めに五年もかかったのは無能だという烙印を押されて追放。美濃三人衆にして名軍師竹中半兵衛の舅として知られた安藤守就は、半兵衛亡きあとには不要と考えたのか、武田家に内通したという容疑で追放。

これらの大粛清劇によって、信長が何を意図していたかは結果を見るとわかる。すなわち、権臣たちを廃して、信忠、信雄、信孝といった自分の子供たちをそれぞれ要職に据えたかったのだ。

従属国の当主・徳川家康に、妻の築山殿（瀬名姫）と長子・信康が武田勝頼に内通しているという容疑で粛清命令が下ったのも、その粛清劇の前触れだったのだろう。

御館の乱によって、大上杉の国力が半減したいま、徳川が武田方などの室町幕府勢力と結んでも脅威ではない。そこで盟友徳川家康の領土が大きすぎると考えていた信長は、無理難題を押しつけることで挑発し、万一、家康が反旗を翻せば、攻め滅ぼしてその領土を手に入れようとしたのではないか、と思われている。

また、この事件の裏側には、勝成の与り知らぬところで水野家が、深くかかわっていた。水野家というのは、三河と尾張にまたがる豪族である。

勝成の祖父水野忠政は、駿河、遠江、三河の雄今川氏と尾張の織田氏にいい顔をしつつ、近隣の有力者たちに娘を嫁がせて上手く立ち回った。

おかげで今川家の傘下であった徳川家康の母は、忠政の娘於大の方だ。

忠政が亡くなると息子の水野信元があとを継ぐ。この信元は、明確に織田の味方を表明。そのせいで於大の方は生後間もない家康を置いて、実家に帰されてしまった。

しかし、信元の選択は間違っていないかったのだろう。水野家は知多半島の雄となり、織田信長の台頭に大きく貢献した。また徳川家康を今川から織田方へと寝返らせたのも彼の功績だ。

織田信長、徳川家康の若いころの重要合戦にはほとんど顔を出している。

おかげで信元的最盛期の石高は、二十四万石といわれるほどだ。石高だけで考えると過大だが、当時の日本最大の窠元常滑を抑え、知多半島をめぐる海運の利益を考えれば、そのくらいの地力はあったのだろう。

信長、家康からみると、恩人といつていいほどの人物だ。

しかし、天正三年（1576）十二月、信長の武將・佐久間信盛の讒言により武田勝頼に内通した疑いをかけられて殺害されてしまった。

この事件の救いのないところは織田信長以外の関係者がみな、信元は冤罪だと思ってい

たらしいことだ。

家康は、信長に翻意を求めていたという。

しかし、家康の嫡男の信康が暴走。側近である石川数正いしかわかずまさに信元を誘い出させて、平岩親吉ひらいわちかよしに殺害させた。

刺客であった親吉は、信元の屍を抱いて泣きながら謝罪したという。

勝成の父忠重は、信元の末弟である。

今川家から独立したばかりの家康を助けるために、信元の指示で徳川家に派遣されていたのだ。そのため難を逃れた。

そして、信元肅清事件によって徳川家臣団は真つ二つに割れてしまう。

すなわち、徳川家康の浜松派と、松平信康まつだいらの岡崎派だ。

「信元どのは、我らの恩人だぞ。それを事実無根の罪で謀殺するとは何事だ」

と徳川古参の家臣は義憤にかられ、信康を徳川の次期当主として相応しくないと考えるようになったのだ。

そして、この派閥争いの裏側に、信元の妹にして、家康の母、そして、勝成の伯母於大の方がいたといわれる。

信元肅清にともない水野家が潰れると、於大の方は息子の家康の下に身を寄せていたの

だ。

彼女が兄の仇である岡崎派に好意的である理由がない。

家康の側室お愛あいの方さいじょうのつぼね（西郷局）が、天正七年（1579）四月七日に長丸ちやうまる（のちの徳川秀忠ひでただ）を産むと、その乳兄弟に甥の勝成を当てた。

といつても、十六歳の勝成が、乳飲み子相手に何かできるはずもなく、この時点では単なる形式上のことだ。

このような折に、五徳の夫・信康が側室を持ち、その手配したのが姑の築山殿らしい、と愚痴った手紙を五徳が父・信長の元へ出した。

五徳は女子をふたり儲けたものの、肝心の嫡男をあげていない。もし、信康に誠意があれば、この段階で側室を持たせることはあつてはならないことだった。

信長はこの手紙を利用して、徳川筆頭家老にして、浜松派の棟梁酒井忠次さかいただつぐを呼び出して締め上げる。

忠次は信康を弁護しなかった。

自分の書いた手紙が、よもやそんな高度な政治的綱引きに使われたあげくに、夫と義母を死に追いやることになろうとは、五徳の想像の及ばぬ事態だったに違いない。だが、結果的には悪女の汚名を着せられ、ふたりの子供を奪われ、婚家を追われたのである。

「姫さま、いま少しの辛抱です。間もなく刈谷城にございます」

難しい政治の話などまるで理解できない勝成は、ただこの綺麗な姫君に夢中になって、道中、駕籠かごの周りを独楽鼠ごまねずみのようにかしましく動き回っていた。

水野一行の護衛は織田と徳川の国境にある三河刈谷城までである。ここで一泊して翌日から織田家中のものと代わる手はずだった。

その夜、城内では傷心の五徳姫を慰めるために、別れの宴が設けられる。

若い男衆は膳を持って、五徳姫や女房衆に酌をして回ることとなった。

女を接待するときは、若い男がするものだ。男が接待されるとき若い女がいいのと同じで、女も若い男にちやほやされることを喜ぶ。

もつとも、儂はかなくも超然とした美貌の五徳姫が、このような俗な接待を楽しんでいるとはとても見えなかつたが……。

「なあ、勝成。さすがは五徳さまお付きの女房衆。みんな綺麗だな」

大広間から下がったところで、そう耳打ちしてきた少年は、勝成とともに男芸者をやらされている中山重盛なかやましげもりだった。重盛は水野忠重の姉婿・中山勝時かつときの孫で、勝成とは半従兄弟の関係にある。

中山氏の領地であった桶狭間は、あの有名な桶狭間の戦いの舞台となった。また、童話

『ごんぎつね』の舞台でもあり、作中に「中山さま」が登場する。

「そんなの興味ねえよ」

「ほう、そんなこと言っていていいのか？ 旅に出た女は開放的な気分になるものだ。気に入られたら、夜伽よとぎを命じられるかもしれないぬぞ。……ほら、右京うきょうなど、先ほどから女房衆に気に入られようと、ちよろちよろしとる」

重盛の視線の先では、勝成の母方の従兄弟である都築つづき右京景春かげはるが甲斐甲斐しく動き回っていた。

「それにだ。おまえのお気に入りの五徳さまだつてあるいは……」

「ま、ま、誠か！」

目の端で、麗しい五徳姫の姿を捕らえながら、勝成は重盛に食って掛かる。

「ばーか、本気にするやつがあるか。あんな雲の上の女性がそんなことするはずねえだろ」  
「てめつ……！」

からかわれたと知った勝成は重盛の尻を蹴飛ばした。すると、たまたま空皿を持って下がってきた右京にぶつかる。

「わっ、あぶねえな！ なにすんだよっ！」

「うるせえ、この野郎、馬っ気出してんじゃねえよっ！」



勝成は巻き添えの右京まで蹴りを入れた。ガチャンガチャンと派手な音がして、投げ出された皿が砕け散る。

それを契機として、元氣の有り余っている少年たちは、取っ組み合いの喧嘩をはじめってしまった。その喧嘩は当然ながら、壁越しに姫様たちにも届く。

「おほほほ……。ほんに元氣なこと」

隣室での騒動を聞いた女房衆たちは愉快げに笑った。

男衆のみならず、五徳姫お付き女房衆たちは傷心の主君を慰めようと心を砕き、場を盛り上げようと努力していたのだ。

「勝成どのはおいくつで？」

「十六歳になります」

女房衆の質問に勝成は、平然と答えた。喧嘩相手の少年たちは打ち身や痣ができたのに、彼のほうはまったくの無傷である。

そんなやんちゃ坊主ぶりに、女房衆の方々は愛しげに目を細めた。

女といえども乱世に武家の屋敷に奉公しているのだ。普段から武士を見慣れている。なにげにお酌をして回るだけでも、勝成の颯爽とした立ち居振る舞いを見れば、使える武者かどうかの判断はおよそ察しがつく。

「勝成どのは、ほんによい男っぷりですこと。さぞ女に、おもてになるのでしょう」

「いえ、そのようなことは……」

生意気盛りの少年が赤くなるのを見て、女房衆は愉快そうに笑う。年上の女にとって、こういう童貞臭い少年は玩具である。みなでからかつて楽しんでいるのだ。

「勝成どのは、信康さまに似ておりますな」

「それは信康さまとそれがしは……縁戚になりますゆえ」

徳川家康と勝成は、年は離れていたが従兄弟だ。従って勝成と家康の子・信康にも血の繋がりはある。

勝成も信康も血縁関係がある上に、若き日から武辺者として知られた存在であったから、容姿や雰囲気似ていても不思議はない。

不意に五徳姫は立ち上がった。

「……っ」

亡夫・信康のことを話題にしたのは不謹慎だったかと場が緊張するなか、そんな空気など知らぬ風に五徳は口を開く。

「少し酔いました。酔いぎましに中庭を散策してきます」

慌てて付き従おうとする女房衆や侍女たちを、五徳姫はやんわりと押しとどめた。

「よいのです。そなたたちは楽しんでいなさい。勝成、供をしなさい」

「はっ、ただいま！」

勝成は五徳に付き従い、城の中庭を案内した。

刈谷城は城といっても田舎土豪の城にすぎない。屋敷に毛が生えたような代物で、城館という程度だった。中庭もそれほど見るべきものがあるわけではない。

旧暦の十月といえは、もう冬だ。

凍てつく宵闇のなか、満天の星々が無限の瞬きを送ってくる。酔いの回った体には、さぞや気持ちいいのだろう。五徳は陶然とした表情で夜空を見上げた。

「……たしか刈谷城は水野家の持ち城でしたか？」

「いえ……いまは、違います」

勝成は悔しそうに否定した。

水野家の累代の居城は尾張緒川城だ。勝成の祖父水野忠政の時代にこの三河刈谷に進出して、城を築いた。対今川の最前線基地として機能した城である。そして、何度も落城の憂き目をみた激戦地だ。

そんな水野一族の血潮を吸って確保してきた城も、いまや織田家の佐久間信盛の物となっていた。

「……父上も酷いことをなさる」

悲しそうに溜息を漏らす五徳の目元には、うつすらと涙が浮かんでいる。

人生に絶望し、触れれば壊れてしまいそうな傷心の姿が痛々しい。喪に服した姫君の儂い美しさが放つ退廃的なまでの凄艶な色香は、若く健康で将来への野心と覇気に満ちた少年とは何から何まで対照的だった。

それだけに心惹かれる。

「少し冷えてきましたね」

「では、部屋に戻りましょう。夜の冷気はお体に障ります」

勝成が案内しようとしたとき、五徳は何気ない所作で間合いを詰めると、その胸に顔を埋めてきた。

「ひ、姫さま……」

「温かい……しばらくこのままで」

「は……はい」

緊張にガチガチになりながらも勝成は、素直に五徳を抱きしめた。

柔らかい、と驚いていると、嗚咽が聞こえてきて、五徳の肩が震えている。

それと気づいた勝成は絶句してしまうが、いまはただ胸を貸すことしかできなかった。

苦悶の日々を気丈に耐えていた彼女の精神も、ついに崩壊したということだろうか。

勝成の筋肉質な両腕のなかで、彼女はなんと小さくて脆いのだろう。力いっぱい抱きしめたら粉々に砕け散ってしまいそうだった。

着物や髪に焚き込んだであろう、上流階級の女だけがつけることの叶う高価な香料の匂いと、女の甘い体臭が、純情な少年の鼻腔をくすぐった。

降るような星空、冬の澄んだ冷気が肌に突き刺している夜の闇にあつて、腕のなかの温もりだけがたまらなく愛しい。

いったいどれほどの時間が流れたのだろうか。勝成には悠久の時の流れにさえ感じたころ、ようやく五徳が顔をあげた。

「ごめんなさい。弱いところを見せてしまいましたね」

「……いえ、その」

その酔いと悲しみに乱れた麗しき未亡人の表情は、十代の少年が間近に見るには、あまりにも艶かしすぎた。

もつと気の利いた言葉をかけるべきだとは思ったが、勝成の舌は麻痺してしまい、まともにも回らない。

「慰めの言葉なら無用です……それより、勝成」

「え、え、わたし？」

戸惑う少女は、十代半ばぐらいから前半ぐらい。丸顔が幼さを感じさせるが、たんぽぼ色の着物のうえからもわかる巨乳である。

勝成は遠慮なく、両手で少女の胸乳を触れた。それは触れたというかわいいものではなく、乳房の大きさを測るように入念に撫でまわした。

「おっ、いい乳しているな」

「あうっ、おやめください、お戯れがすぎます」

驚き逃げようとする少女を、今度はその大きな腕で抱きしめた勝成は、尻肉を両手で驚き掴みにした。

「キャッ、やめてください……」

「尻も大きくていい。これは安産型だな」

男の胸に顔を埋めたまま少女はかわいい悲鳴をあげて震えていると、尻肉の触り心地のよさを堪能した勝成は、ついで顔を覗き込んだ。

「おまえ名はなんという？」

「青木あおきこじか小鹿と申します。染物屋の娘の……」

「小鹿か、いい名だ。よし、決めた。今宵の夜伽はおまえだ」

宣言すると同時に小鹿を肩に担ぎ上げる。他の女たちが不満の声をあげるなか、勝成は颯爽と愛馬に跨った。

「え！ な、なに？」

あまりにも突然のことに、小鹿は驚いている暇もない。気づけば馬上、雲上人である次期城主さまの左肩の上で、尻を前方に向けて腹ばいになっている。

大きな目を白黒させながら手足をジタバタさせていると、尻をパンツと叩かれた。

「こちら、暴れるな。落ちるぞ。あとでたっぷり暴れさせてやるからいまは大人しくしている」

「え、ええ……！」

何が何だかわからず混乱している哀れな少女を横目に、側で馬を歩ませていた騎馬武者が苦笑する。

「若も好きですな」

河村重長。かわむらしげなが通称は新八郎。しんぱちろう勝成より若干年上で、水野家の次代を担う勇士と目されている。狸皮を具足羽織に使用しているため、「狸皮新八」という異名で呼ばれていた。

まるで水野家滅亡時の家臣団の生活苦をそのまま体現しているような格好だが、水野家の復興したいまでも、もはや狸皮の具足羽織が彼のトレードマークになってしまっている

から、やめることはできないのだろう。

負けん気の強い勝成としては、やりあつても負けないという自負はあるが、やりあうことがあるはずもなく、もつとも信頼する兄貴分といつていいだろう。

勝成は悪ぶれずに、肩の女を揺する。

「いい女だろ。一目惚れだ。この大きな尻といい、でかい乳といい、これは抱き応えがあるぜ。まだ初心うぶだけどな。そこはまあ、これからたつぷり調教しがいがあるつてことだ。それに顔も狸みたいでかわいいぜ」

(た、狸みたいな顔！)

状況を忘れて、ちよつぱりショックな小鹿である。

小鹿は城下町に住む平凡な町娘にすぎなかつた。ごく普通の刈谷城の城下町に住む少女として、友達たちと連れ立って、凱旋する若様を見学にきて、友達と一緒にキヤーキヤーと騒いでいただけだ。

城主の嫡男で若き英雄である勝成に憧れていたが、あくまでも憧れである。まさか自分が目に留まり、こんなあからさまに拉致されるとは夢想だにできなかった。

「ほれっ」

肩に担ぐ少女の両足首を掴んだ勝成は、左右にガバツと開いた。



「キヤッ！」

小鹿は喫驚の悲鳴をあげたが、足は一瞬にして閉じられた。

「まだ俺もみてないのに、おまえらになんかみせてやるかよ」

勝成のおどけた態度に、あたりは下卑た笑いが弾ける。

一瞬のこととはいえ、小鹿は口から心臓が飛び出るかというほどの衝撃を受けた。

女は着物の下に男のような禪をしないから、めくられたら最後、女のお大事を隠すものはなにもないのである。それなのに、こんな大勢の注目を浴びている場所で、大股開きにされてしまうなんて……。

沿道の庶民たちは、勝成の勇姿を見学するとともに、その肩に乗っている少女はだれだろうと噂している。

みんなに見られている、と感じたのは小鹿の自意識過剰ではない。実際に、小鹿の痴態は、沿道の観客すべての人々に、好奇の眼差しで見つめられていた。

米屋、野菜売り、魚問屋、小間物売り、桶屋、大工、医者、蒔絵屋、鍛冶屋、鎧師、鞆師などなどの職人たち、親子連れや、悪ガキ風の子供たち、とにかくありとあらゆる城下町に住まう人たちに見られている。

さらし者である、と自覚した小鹿は、羞恥のあまり真っ赤な顔をして、プルプルと震え

ていたが、そのさまがなんとも愛らしくて、見ているものの微笑を誘った。

「見れば見るだけ、いい尻だ。プリンプリンしているもんな。早く食べたいぜ」

チュツとお尻の横に接吻した勝成は、着物の裾から手を入れ、真っ白い新鮮な大根を思わせる太腿を撫でまわした。

「それにこの太い太腿。くーっ、たまらねえ。こりや締まるぜ。キュツと締まる。間違いねえ、これは掘り出し物の名器だ。まさしく俺の初手柄を飾るに相応しい女だな」

勝成にとつて庶民の女など、畑に生えている大根と同じである。勝手に取って食べても、だれも責めはしない。

まして小鹿は、勝成の凱旋をキャーキャー黄色い歓声を送っていた娘のひとりである。抱かれるのなら、果報と歓ぶだろう。

実際に小鹿は特に言い交わした男がいるわけではなく、好きな男もいなかった。他の少女たちと同じく勝成に憧れていたから、普通に口説かれたなら呆気なく腰が砕けて、自分から濡れた股を開いてしまったことだろう。

しかし、いまの状況はあまりにも異常であった。

城にまで続く街道には、次期城主を称えようとする多くの人がでてきている。その衆人環視のなかで勝成は小鹿を肩に担いで、その太腿から尻を愛撫しているのだ。しかも指先

が、内腿を割って奥へ奥へと探索していく。

「あっ」

小鹿は小さく叫んだ。

勝成の指先が、ついに女唇を捉えた。人差し指と中指と薬指の三本で、大陰唇をぴったりと押さえられる。そのまま優しく全体を愛撫された。

「はあ、はう、あう……」

かわいらしい顔を真っ赤に紅潮させた少女が、熱い吐息を隠せない。

緊張と驚愕に渴ききっていたはずの陰唇が、少しずつ緩くなってくる。

「お、濡れてきたな」

勝成が悪戯っぽく笑った。

健康な女なら、陰唇を男に翳なぶられていれば濡れてしまうのは当たり前前だ。

まして、女にとって羞恥心とは、ある意味で媚薬である。一度、堰せきを切った愛液はとめどなく溢れて内腿を濡らしてしまった。街頭の人々の視線からも、小鹿の内腿が、陽光を浴びて濡れ光っているさまがわかっただろう。

たっぷりと愛液を掬った指先が秘裂のなかを弄び、さらには淫核まで捉えた。

「ああ……」

顔を真っ赤にした小鹿は、勝成の背中にしがみつき、健康的な足が空中を搔いた。

「おっ、いったのか？ 感度いいなおまえ」

「……うう」

小鹿はイヤイヤと首を横に振るが、勝成は面白がつて愛撫を止めない。

「……勝成さま、もうご容赦してください」

「ダメ、おまえかわいいんだもん」

含羞を噛み締めた小鹿は涙ながらに訴えるも、勝成は聞く耳を持たない。

「あう……、意地悪でございますう。はあつ、ダメ、そこは……」

愛液に濡れた武骨な指が一本、膣内に入ってきた。小鹿は身悶えたが、勝成の肩の上から逃れられるはずもない。

たとえ処女でも、月のものがある以上、指の一本ぐらい入るのである。

「おっ、なかもザラザラしてイイ感じた。それにキュッキュッと締めるな」

「あう……お願ひします。お……お指を入れないでください」

膣に男の指を入れられているのは、女にとつて大変な違和感だ。まして生娘ならなおさらであろう。小鹿は息も絶え絶えの風情で懇願するが、勝成は一笑に付する。

「おいおい、指を入れられたくらいでそんな色っぽい声を出すなよ。あとで俺のぶつとい



ものを根本までずつぽり入れてやるから、そのとき思いきり色っぽい声をあげな」

「そ、そんな……こと言われても、困りますう……」

このあと、やつぱり陵辱されるのだと知って小鹿はますます顔を赤くした。

「まあ、とりあえず指で我慢しな。おまえの新鉢は俺が責任を持って割ってやるからよ」

「はう……あつ、あはつ……ひいん……」

衆人監視のなか腔洞に指を突っ込まれ、さらに親指で陰核をクリクリと回された小鹿はもはや口もきけない。ただただこれ以上の痴態をさらすまいと、喘ぎを我慢しているのだが、どうしても口の端から漏れてしまう。

「若にも困ったものだ。いまし水野家の嫡子としての自覚を持っていただかないと」

思わずぽやいたのは、勝成の乱痴気騒ぎの傍で馬を歩ませている鈴木与八郎すずきよはちろうである。名は重親しげちかという。水野家を代表する勇士のひとりである。

武勇に優れているだけではなく、機知に優れていることもあって、当主・水野忠重の覚えもめでたい。そのため忠重の小姓をしていることもあって、

ただし、「筋目正しき者なれど、日ごろだらしない」と評判を持つ男で、身なりには頓着とんちやくしない。

「若はあれでいいんだよ」

聞きとがめた河村重長が弁護した。

「戦場では武功をあげ、女を抱く。これこそ武士の本懐だ。家中には若に憧れこそすれ、嫌悪しているやつなんかひとりもいやしない。若のまえでは、女たちは股を濡らして自分から足を開いているんだからな。あの娘だって、恥ずかしがっていても、若に選ばれたことを喜んでゐるぜ」

「たしかにな。将兵はみな、だれにも真似できないことをやってみせる若が好きだ」  
戦友のいうことを認めて与八郎は苦笑した。

「おれも若のことは嫌いじゃない。ただ、あまりにも無軌道な若のことが、最近の殿にはご不興らしくてね。ふたりの親子仲がしっくりいってないようなのが心配なんだ」

「おまえは苦労性だな。息子が活躍して喜ばない親がいるか」

「杞憂に終わればいいんだが……」

能天気な同僚をまえに、気苦労の絶えない与八郎は溜息をついた。

水野家の将来を担う若き守護神たちは、轡くわを並べて勝成に続く。その視線の先には、何度目かの絶頂強いられてしまったらしい、哀れな生贄の少女の顔があった。

※

「これは父上母上お揃いでの出迎え恐縮です。勝成、ただいま帰りました」

勝成は両手で乳房を揉みしだきながら、その頂を飾る紅梅の如き乳首を口に含んだ。

「こ、この、ならずもの……やめなさい、ああ！」

気高き乙女の抵抗は虚しく、紅梅の如き乳首は男の唾液に汚されて、大きく膨らんでしまった。

勃起した乳首は女にとって極めて敏感な性感帯だ。それを執拗に舐めしゃぶられた律子は、不本意な快楽に耐えねばならなかった。

やがて紅梅の味に満足した勝成の手は、律子の両足首を掴み頭の上に持つてくると、V字に開いてやった。いわゆるまんぐり返しである。

襦袢がめくられて女唇はもちろん、引き締まった尻の狭間にアナルまであらわたとなる。

澄ました顔とは裏腹に、黒々とした陰毛がモツサリと密生していた。

「くくくつ、いい眺めだ」

気位の高い女にわざと恥ずかしい姿勢を取らせて楽しんでいるのだ。

「無礼者！ 離しなさい！ あなたの武士としての矜持きょうじはどこにいきましたか？」

凜とした律子の罵声に、勝成はむしろ喜ぶ。

「くつくつくつ、さすがはその若さで使者に選ばれる才媛だけある。ここいたつても冷静に振る舞うか。しかしなあ、男と女、ここまできたら止まるわけねえだろうが、あまりう



るさいことをいうと、まず口に唾えさせるぞ」

「殺しなさい。使命を果たせず、辱められるくらいならば死を選びます」

律子の目は本気だ。いまは勝成に押さえつけられており、懐剣を抜くこともかなわぬが、ことが終わったあと自決する覚悟のようだ。

しかし、そんな死を決した女の気迫にも、勝成は頓着しなかった。それどころか、肉裂の左右に両手の人差し指をそえると、思いつきり開いてやる。

「よせよせ、おまえが死んだつてなにも変わらねえよ。それよりおまえ未通女おぼこだろ。男を知らねえで死ぬなんて女として産まれてきたかいがないぜ」

「くっ！ 余計なお世話です！」

キツと睨んでくる律子の陰唇を指でなぞりながら勝成は嘯うそぶく。

「未通女と開通女の一番の違いはな。肉饅頭の匂いなんだよ。男を知った女は、この重要さをよく知っているから、普段から綺麗に洗浄しているものなのさ。しかし、未通女つてやつは、ここの重要さがいまひとつわからないんだよな。あまり洗ってない。真面目な女ほど、自分で触れることに変な罪悪感を覚えるらしい」

そこでいったん言葉を切った勝成は、鼻先を女陰に近づけてクンクンと匂いを嗅ぐ真似をした。

「おまえの肉饅頭はすげえ匂うぜ」

「なっ！ なっ？ なっ！ なんといいことを!!」

切れ長の美しい目元を見開いた律子は、顔を真っ赤にして絶句してしまった。

女のもっとも重要で、神聖な場所を匂うなどといわれて動揺しない女はいないだろう。

「小水と垢と汗と不浄の匂い。くっくっくっ、匂いだけでなく、見ただけでもわかるな。

おまえの肉饅頭のなかは、恥垢だらけだ」

別に誇るつもりはないが、律子は自分の容姿にごく自然な自信を持っている。

武田家が健在ならば、しかるべき家に嫁ぐつもりだった。しかし、亡国の主君の松姫は武田家の慰霊を守るために生涯独身の覚悟を決めているのだ。それに付き合う自分も、気高き同じ道を歩むつもりでいた。

それなのに、まさかこのような場所で無法な男に捕まり、このような女の尊厳を貶めるような言葉を浴びせられようとは予想だにしていなかったのだ。

恥辱に顔を真っ赤にしている女の目の前で、贅肉を容赦なく捲り上げた勝成は、膺口の奥まで覗き込んだ。

「ほら、やっぱり膜がありやがった」

「!？」

「こんないい女の膜をいつまでも後生大事に残しておくなんて、武田武士のやつらどうかしているんじゃないのか？」

勝成の感想がよほど聞き捨てならなかったのだろう。律子は鋭い眼光で叫ぶ。

「誇りある武田武士には、あなたのような外道はいなかったのよ！」

「いい女を放置するなんて、武士以前に男じゃないぜ」

律子の剣幕など意に介さず勝成は、その紅葉よりも赤く燃えている女の秘肉にしゃぶりついた。

それもわざと下品な粘着質な水音を立てながらすすする。

「ああっ！」

屈辱に目を濡らしていた律子であったが、執拗に陰部を舐めまわされているうちにやがて耐えられず被虐の吐息を漏らしてしまった。

いつしか、割れ目の内部から溢れ出した愛液が下腹部を流れ降りている。

「おい、おまえ、尻の穴まで丸見えだぜ。立派な武田武士の女が恥ずかしくないのか」

「ああ、そんな、そんなところみないで……」

挿揄された律子は、羞恥に身悶えるがどうすることもできない。勝成は尻の穴から会陰部、陰唇の中身、膣口、そして淫核まで入念に舐めしゃぶった。

「小せえ、お豆だな」

口の周りを愛液で汚した勝成は、いったん顔をあげて薄い包皮に包まれた陰核を小突いた。

「あ、だめ、そこは……」

「おまえ、気取ってやがるから、自分でここ触ったこともねえだろう」

強い刺激に慌てる律子の陰核を包む包皮を、勝成は強引に剥きあげた。

「ひいひい！」

空気に触れただけでも痛い敏感な器官なのに、勝成は吸いついて舌先で嬲りはじめた。

「あ、ああ、やめて、イヤ、あ……そこはダメ、ああ、そこ許して、しびれる。しびれるの、ああ！」

主君のために死ぬ覚悟をしている女である。いかなる困難にも耐えるつもりであったが、快感というものへの耐性がなさすぎた。

生剥きされてしまった律子は、なすすべもなく絶頂してしまう。しかし、勝成は離れなかった。執拗に剥き出しの陰核を責め続ける。おかげで律子は不本意な絶頂を連続で味わされることになってしまった。

「ああ……お、お願い、もう許して……これ以上は……ひいく」

「まあ、そろそろいいだろう」

気位の高かった女が、涙目になって懇願してきた。

その膣口はヒクヒクと痙攣し、奥から愛液がとめどなく溢れている。

律子が完全に堕ちたことを察した勝成は、ようやく陰核から口を話すといったん身を起して、袴と褌を解く。

貴公子然とした顔とは裏腹の、野太い凶器があらわとなる。

「ひっ……！」

はじめてみる異性の生殖器のまえに思わず喉を引きつらせた律子だが、女の恥部をさらした無様な姿勢のまま動くことも叶わない。腰が抜けてしまっているのだ。

まんぐり返しの態勢で、律子の視界からもよくみえる濡れそぼった割れ目に、野太い肉槍があてがわれた。

「では、覚悟しな。おまえの望み通りあの世に送ってやろう」

律子は焼き鑊でも当てられたかの如く、身を堅くしたがどうにもならなかった。

腰を高く掲げた武家の才女の肉裂のなかに亀頭部がゆつくりと押し込まれていく。

ブツン！

「あああうっ……！」

律子が見守るままで、非道なる肉槍は根本までずっぽりと打ち込まれてしまった。

白い下腹部にみるみるうちに鮮血が滴り落ちていく。律子は出血の多い体質だったようだ。

「くつくつくつ、見ろよ。血まみれで石榴ざくろみたいになっっているぜ」

勝成は、わざと結合部分を見せつけているのは明らかだった。

律子の恥ずかしい場所に、男の野太い肉棒が突き刺さり、引き抜かれる。そのたびに卑猥な水音がして、血まみれの肉襷がまくれかえった。

「……酷い」

屈辱のあまり齒噛みした律子だが、なぜかその光景から目を離せなかった。

律子があまりにも武家の女としての矜持に富んだ優等生であるだけに、思いつきり辱めてやりたい、という加虐的な気分になった勝成は、そのまま荒々しく腰を使う。

「なかなかいい肉壺だな。ぬるぬるとした襷肉が絡まってくる。ミミズ千匹だな」

「くっ」

勝成の称賛を、律子は喜ばずに顔を背ける。

「ふっ」

その気の強さにいっそうひかれた勝成は、ここ数日溜まりに溜まっていた性欲を発散さ



せるべく、獸のように激しく陵辱してやった。

「あつ、あつ、あつ」

「くっ、そろそろイクぞ」

呻き声とともに勝成は逸物を爆発させた。

ドクン！ ドクン！ ドクン！

「ううううくくぐううう……っ」

膣内射精をされてしまった律子は、目元を涙に濡らして惚けている。破瓜の痛みのせいで絶頂はできなかったようだ。

欲望を吐き出した勝成は、律子に訴える。

「気に入ったぜ。俺の女になれ」

「ふざけたことを……」

もはや覚悟を決めてしまっている律子を見下ろして、勝成は苦笑する。

「こんな場所におまえをひとりでよこすなんて、松姫ってやつは、ろくな主人じゃねえぜ。そんなのより、俺に仕えたほうが幸せだぞ」

「姫様を侮辱することは許しません！」

惚けていた律子の顔に生気が戻り、掴みかかってきた。それを適当にいなしながら勝成



は笑う。

「まあ、いいや。時間だけはたっぷりあまって困っていたんだ。これから時間をかけて口説き落としてやるぜ」

こうして気高き女は自殺する隙も与えられず、一日中、男の玩具にされてしまった。

※

「松千代か、おまえ人の恋路を邪魔すると馬に蹴られて死ぬぞ！」

部屋の周囲が急に騒がしくなったので、勝成は怒鳴りつけた。

「いえ新八です。若、一大事ですぞ！」

木戸が開かれたと思ったら河村重長が血相を変えて駆け込んできた。

知的な美人が、獣のように四つん這いにされて犯されていることにさえ気づかない様子である。

「何かあったのか？ 見ての通り俺は取り込み中なんだがな……」

勝成は、律子の股間から逸物を引き抜こうともせず、それどころか見せつけるように女の美乳を弄びながら応じた。

「若、悠長に女など抱いている場合ではありませんせぬぞ。鳥居どのが我らを置いて出陣致しました！」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**